
幕末異聞 疾風録 4 ~必殺？！ お守り奪還作戦！

花衣 悠希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末異聞 疾風録4～必殺？！ お守り奪還作戦！

【Zコード】

Z6390F

【作者名】

花衣 悠希

【あらすじ】

時は幕末。長州藩士、品川弥一郎が京の町で落としてしまったお守りは松陰先生の手作り品で大事なもの。ところが、なんとそれは新選組に浪士探索の証拠品として押収されてしまっていた。何とか彼らからお守りを奪還しようと、桂小五郎、高杉晋作たちは策謀をめぐらすが・・・長州藩志士VS新選組の行方はいかに？！ドタバタ幕末ファンタジー第4弾です！

第1話・行方

「なんだつてええええ～？！」

時は幕末、京都河原町の長州藩邸から素つ頓狂な声が響き渡った。藩邸内の座敷では品川弥一郎がしょぼん、と小さくなつて座つていた。目には涙を溜めている。

「まあ、そんなこと言つても仕方ないでしょ？　・・・　晋作、大体あなたが悪いんですよ？　弥一郎をそのままにして帰っちゃうから。」

「卓の上で書き物をしながら桂小五郎がたしなめるよつに言った。

「だあつてよお～。まさかそんな事になるとは思つてなかつたからさあ～。・・・　悪い弥一、本当」めん。」

冒頭の声の主、高杉晋作は立ち上がりて頭を下げる。弥一郎はあわてて首を振つた。

「謝らないで下さい、高杉さんつづ！　・　ぼ、僕が悪いんですう。どんくさく通りを歩いてたりなんかしたから・・・。」

その瞬間ぱたぱたっと畳の上に涙が落ちる。

「弥一～、そんなに自分を責めないでよ～。弥一のせいじゃないつて。よく逃げ切れたと思うよ。」

弥一郎の隣りでは吉田栄太郎がしきりに慰めている。

「・・・　でも、お守りを無くしたのはまずかつたかも。桂さん、どうしましちゃう？」

栄太郎は小五郎の方に向かつて言った。

小五郎の書く手がふつ、と止まった。

事の次第はこうである。

* * *

先日、晋作と弥一郎の二人が料亭に連れ立つて遊びに行つたのが、（正確には晋作が無理やり連れて行つたのだが）そこでしばらく遊んでいると、たまたま晋作の知り合いの芸妓にばったり会い、話が盛り上がり上がつてしまつと、晋作はそのまま弥一郎を置いて彼女と別の場所に飲みに行つてしまつたのだった。

後に残された弥一郎は仕方なく夜道をとぼとぼと歩いて帰つていた。

ところが。

その途中、浪士組の探索網に引っかかつて襲われてしまつたのである。

命からがら逃げる弥一郎。

逃げる途中、七条の三十三間堂が目に入り、そこの中の本堂の観音像の中に身を潜めて何とか振り切れたのだが、気がつくと今まで肌身離さず身につけていたお守りがない！

* * *

「普通のお守りなら何とでもなつたんですけどねえ・・・。ようにもよつて松陰先生の手作りお守りとは・・・。」

小五郎はため息をついた。

「ほ、僕、松陰先生の下さつたものは全部宝物なんですよ！ 店で売つてるものだつて、手作りだつて変わりませんっつ。」

弥一郎は必死になつて言つた。

「分かつてますつて、弥一郎。問題はそうじやなくてですねえ。松陰先生、超びっくり人間でしたから、お守りの中に絶対何か仕込んでいるはずなんですよ。考えたくはないんですけど、もし万が一、そ

れが幕府のお偉いさん方の暗殺計画だつたりしたら・・・本当に拾つた人間によつてはまずい事態になりかねないんです。」

「そ、そんな。あれは、ふ、普通のお守りですっつ。先生も何も言いませんでしたし、変なとこなんて何もありませんっつ。」

弥一郎は躍起になつている。

だが、小五郎は容赦が無い。

「でも、中に何が入つてたのか見てないんでしょう？ 何にも無いって確証とれます？」

「・・・ううう・・・。その通りですか・・・。」

弥一郎は反論できずに、しおげ返つてしまつた。

「なあ弥一、そのお守りつてどんなのよ、一体？」

晋作が腕組みをしながら言つた。

「え、えーっとですね。色はピンク色なんですが、大きさがこれくらいでえ。」

言いながら指で形をつくる。

「・・・おこ、それちよつと形おかしくないか？」

晋作はその形を見て怪訝そうな顔をした。

「いえ、これはハート形なんです！」

弥一郎はきつぱり断言した。

「ハ、ハート形あ～？！」

晋作と栄太郎は啞然としてしまつた。

「どこが普通のお守りだよ 弥一郎・・・。

だが、小五郎は啞然とするよりも無く再びふうとため息をついた。
「やつぱりね・・・。実はハート形のお守りなり、心当たりがあります。」

「まじ?...」

「ええっ、うつそー。」

「本当ですかあ。」

三人が思わず小五郎の方に身を乗り出す。

「ただ、ちょっと厄介なところにあるんですねー。」

小五郎はどことなく遠い目をした。

「どこなんですか？ それ。」

栄太郎が重ねて聞いた。

「壬生の浪士組のところですよ。最近彼らがやけにお守りの主を捜しているとの情報は入ったもんではねえ。やれやれ全く、そういうなかつたらいいのことに心底願つてたんですけど・・・。」

「あそこかー。」

「運悪すぎですねー。」

晋作も栄太郎も苦い顔をした。

壬生浪士組。最近江戸からやつて來た会津藩預かりの治安部隊である。長州藩の志士たちから見れば面倒な連中であることは間違いない。

「ほ、僕っ！ その浪士組のところに行つて返してもう一に行きますっつ！」

弥二郎が思いつめたように、急に立ち上がつた。今すぐにでも飛んでいきそうな様子である。

三人ともぎょっとした。

「だ、駄目だよ弥二。」

慌てて栄太郎が弥二郎を座らせた。

「そうだぜー。あいつら返していくださって言つて、あつさり返してくれるような生易しい奴らじやねえんだからよー。ここは冷静に考えないと。・・・なあ、小五郎。」

晋作は小五郎に話を振つた。

「うん？」

「聞いてたのかよ？ さつきの話。」

不審そうな顔をした冒作。

「すいません、ちょっと考え方を。 そうですね・・・まあ、手が無いわけではありませんが。」

「? どうすんだよ?」

「

第2話・策謀

小五郎はちょっと言ひにくそうに言った。

「ほら、先日、村田さんが壬生浪士組の沖田さんを藩邸に連れてきたことがあつたでしょ。誘拐まがいなことをして。」

「？」

いまいち思い出せずに首を捻る晋作に代わって栄太郎が答えた。
「あー、ありましたねえ。そんなことも。でもまあ、村田さんも病氣の沖田さんを治すのに藩邸を使つていう発想がズレてますよねえ。」

小五郎は苦笑いした。

「まあ、あの人に常識を求めるつてのが、そもそもどうかと思いますけど。」

「確かに・・・」

その時、晋作が急に大声を上げた。

「あーっ、壬生の副長がいきなり刀を振り回したヤツね！　あいつ、おつかねーよなー。人を親の敵の様に見てくんだもん。あれは参つたぜー。」

小五郎はキッと晋作を睨みつけた。

「あれは、あなたにも責任があるでしょ。勝手に壬生にちやちや入れに行つたりなんかするから。」

睨みつけられて思わず首を竦める晋作に栄太郎が苦笑しながら言った。

「それを言つなら桂さんもですよ。幾松さんの押しかけ大変でしたもん。」

聞いて晋作も我が意を得たり、とばかりに大きく頷く。

「そうそう！　あれは大変だつたよな。抑えるのに。あれが一番一番。大体、幾松姐さんを放つてた小五郎が悪いんだぞ。」

「あなたたちねえ・・・他人事だと思って。聞く気が無いなら

話しませんよ。」

心底恨めしそうに言つた小五郎。よつほど後が大変だつたらしい。それを察して慌てて晋作が手を横に振り、栄太郎もフォローに入る。「うそうそ。まあ、今は仲良くやつてんだろ？ 結果オーライで良かったじゃねえか。」

「そうですよ～。さすがは桂さんです。・・・それで？」

小五郎はやれやれといつた風に一つため息をつくと続けた。

「・・・それですね。結果として壬生の方々をお騒がせしてしまつたそのお詫びに、と思いまして、局長の近藤さんと副長の土方さんを三本木に招待しているんですよ・・・。」

「まじ？」

「桂さん、まめですね～。」

晋作も栄太郎も感嘆の声を上げる。

「あの、まめとかそういう問題では・・・。とにかく、そんな訳で彼らに不審を抱かせずに接触するのは可能ですか。」

「なるほど。」

晋作の目が光つたのを見て、小五郎は嫌な予感がした。

「晋作？」

「よし！ 三本木だつたら、誰かが芸妓に化けて、奴らを酔わせて、その隙にお守りを奪い取るつての出来るんじゃね？ 小五郎、この線でいこうぜ！」

「晋作・・・ただでさえ迷惑かけてるんですよ？ この上また相手方をハメる氣ですか？ 」これは、さりげなく話を振つて穩便に・・・。

。」

げんなりした小五郎に晋作が強く言つた。

「おいおい、そんな悠長なこと言つてる場合かよ？ 一にも二にも実力行使あるのみ！ 第一こんな願つてもないチャンス、使わないでどーすんだよ。」

「まあ、そうですが・・・。やれやれ、純粹なお詫びにしたかつたのに・・・。」

言いながらあんまり気乗りのしない様子の小五郎。

「でも高杉さん。相手がそのお守り持つてくるとは限らないんじやないですか？」

栄太郎が怪訝そうに言った。

「いーや、絶対持つてくる！　ああいう手合には大事なものは自分の手元に置いてないと気がすまないはずだからな。」

晋作は自信満々に胸を張った。

「・・・私もそう思います。まあ、たとえ持つていなかつたとしてもやつてみる価値はあるかもしませんねえ。何と言つても急を要しますし。」

小五郎はそう言つと晋作の方に向き直つた。

「仕方ありません。私も腹くくりましょう。晋作の策に乗ります。」

「小五郎！　そうこなくつちゃ！」

満面の笑みの晋作に小五郎はにっこり笑つてさらり、と言つた。

「では、芸妓役は晋作、あなたにお願いしますね。」

「・・・・・・は？」

晋作はそれを聞いて豆鉄砲を食らつたような顔をした。

「なんんで俺が？　ヤだぜそんなの。」

「だつて他にいないじゃないですか。」

小五郎は心外という様子である。

「小五郎、お前やれよ。」

「何言つてんですか。私はできませんよ。だつて私が招待主なんですから、そもそもいないとおかしいでしょ。大体こんな大女、まずいでしううが。」

「・・・そりやそりだけど。」

不本意そうな晋作に小五郎はたたみ掛けるように、ちらりと視線を栄太郎と弥一郎に向けた。

「それとも、栄太郎や弥一郎にこんな危ない役をさせる気ですか？」
見ると栄太郎と弥一郎は思わず展開に目をキラキラさせていた。

「頑張つてくださいつゝ、高杉さんっ！」

「大丈夫です！ 高杉さんの芸妓姿、絶対似合つと思ひますっつ。」

「あほかつ！ 似合つてたまるかつ！－ 分かつた、やるよ。」

「やりやあいいんだろつつ。」

「・・・ったく。小五郎、ちゃんと幾松姉さんに話つけといてくれよ。」

晋作はふんつとそっぽを向いた。

小五郎はその様子に苦笑した。

「分かつてますよ。とびきり可愛くなるように頼んどきます。」

「いらんわつつ、そんなのつつ－－！」

再び晋作の大声が藩邸中に響き渡つた。

第3話・前哨戦

数日後。

三本木の料亭では和やかな雰囲気のなか、宴会が始まっていた。

「先日は私どもの藩のものが、本当に申し訳ありませんでした。」

小五郎が近藤勇に深々と頭を下げる。

「いやいやとんでもない。看病までして下さって、本当にこちらの方が礼をすべきでしたのに・・・。」

「沖田さんはその後、健勝でいらっしゃいますか?」

「ああ、ひんぴんしとるよ。さすが、そちらのお医者は腕が違いますなあ。」

そう言つと近藤はおおらかにガハハと笑つた。

ギシツ

天井が急に軋みを立てた。

小五郎はこういう物音には敏感。ふつと音のした方を見上げた。

「何か天井が揺れた気がしましたが・・・。」

「うん? まあ、気づかなかつたが・・・。トシ、お前は気づいたか?」

近藤は隣りでずつと仏頂面の土方歳三に声を掛けた。

「さあな。ネズミじやねえのか。」

歳三はそつけない。

実は歳三は天井裏に浪士組の監察方、山崎蒸を近藤に内緒で潜ませていた。

さつきの物音はそれである。『医者』といつ言葉に反応したらしい。

「そうですね。」

小五郎は歳三の抜け目なさを察して、思わず苦笑した。

これは、たぬきときつねの化かしあいになりそうですねえ。 . . . やれやれ。

その時、襖がするすると開いた。

芸妓が三人深々とお辞儀をしている。鮮やかな朱色の派手な衣装が目に眩しい。

「お酒をお持ちいたしました。以後お見知りあきを。」

三人のうちの一人、幾松はそう言つと酒を運ぶように他の二人に目配せした。

二人はそれを合図に、すつと顔を上げる。

それを見て、不覚にも小五郎は固まってしまった。

か、かわいい・・・。

彼のあばた面はおしろいのせいいか白くすべで、口元は小さくおさまり、目は大きくくりつとしている。また長い睫毛が頬りなく動くのがなんだか儂げで、思わず守つてやりたい衝動にかられてしまう。一体どこをどうしたら不遜不敵な彼からこんな姿が出来上がるのか・・・?

だが、思わず見惚れてしまったのは小五郎だけではなかつた。

近藤も、であつた。

彼はぽかーんとじばら大口を開けて見つめていたが、はつと正氣に戻ると視線の先の左側の芸妓を手招きして呼んだ。彼女はそれに気づくと、足取りもぎこちなく近藤の方へ向かつて進んでいき、遠慮がちに近藤の隣りに座つた。その間にすかさず右側の芸妓は歳三の隣りに座ると、手際よく酌をしだす。

幾松も近藤の前に座るとにっこり笑つて言つた。

「この子はまだ入ったばかりで何かとおかしなこともあるかもし

れませんけど、宜しくしてやつて下さこましね。」

「あ、ああ・・・大丈夫だよ。悪いよつにはしないから。」

近藤はすっかり上の空であった。彼女のまばたきで揺れる睫毛ばつかり見ている。

幾松は再びお辞儀をして近藤の前を辞すると、今度は小五郎の隣りに座つた。

「小五郎さま。」

小五郎はまだ固まつたままだつた。

「小五郎さまつてば！」

幾松が小五郎をいづく。

「え、あ、いや、すいません。ちよつとぼーっとしてしまいました。」

小五郎は素直に謝つた。

「かわいいでしょ。あの子。」

幾松はくすり、と笑つた。

「あ、ああ・・・すゞいですね。まさかあそこまで化けるとは・・・。

「予想外？」

「ええ。」

「惚れた？」

「ええ。」

小五郎はそこで息を継ぐと、幾松にこつこつ笑いかけた。

「あそこまで化かしてくれた幾松さんにな。」

「まあ、お上手。」

幾松は、ほほと笑うと小五郎の杯にお酒を注いだ。

宴は和やかに時は過ぎてゆく。

* * *

「ねえ。」

しばらくして、幾松が小五郎に酌をしながらそつと囁いた。

「高杉さま、ずっとあんな調子だけど大丈夫かしら？」

視線の先にやけに上機嫌な近藤と未だどこか動きがぎこちない晋作の姿がある。

小五郎はにつこり笑つて言つた。

「大丈夫ですよ。彼の胆力には誰も敵いませんから。何とかなるでしょ。 ただ。」

小五郎はふつと遠い目をした。

「ただ？」

「土方さんも下戸ですが、晋作も大概お酒弱いんですね。」

いきなりの爆弾発言をさらりと言われて、幾松の手が思わず止まる。晋作の方を見ると、顔はおしゃりいで分からぬが、確かに頭がかなりふらふらしている。

「えつ？！ ジヤあ・・・。」

「そう。晋作の言つ、酔わせてどつこつする作戦なんて所詮無理なんですよ。まあ、最後にざとなつたら私がなんとかしますけどね。・・・ふつふつふつ。」

不意に笑い出した小五郎に幾松はぎょっとした。

「こ、小五郎さま？！」

小五郎は杯をあおつた。目がどこか据わつている。

「たまにはいいでしょ、こんなのも。大体少しは困つてくれないと、こつちの割りに合いませんからね。」

「・・・あなたも酔つてらつしゃるのね・・・。」

やれやれ、といった風の幾松であった。

第4話・演技

さてはて、視線の先の近藤と晋作であるが。
「ずいぶんおとなしいんだの？」「

ぎくへつ。あやしまれた？！

とにかくバレない様に俯き加減に黙々とじっくりお酒を注いでいた晋作に近藤が声を掛けた。

「えっ？！いや、あの・・・」

思わずしどもどる。声も裏返っている。

だが近藤は全く意に介さない。

「意外にハスキーボイスなんだね。恥ずかしがることないよ。それもどつても可愛いから。」

なんだってーつ。どんな趣味してんだよ、こいつー。

思わず後ずさりしよつとした晋作であったが、彼がそうするより一瞬早く近藤の手が伸びてきた。それになすすべも無く、ぐつと強く腰が引き寄せられるのを感じた瞬間、近藤の顔がすぐ間に迫っていた。

彼は笑顔で顔がとろけそうになつていてる。

「近くで見ると、ますますかわいいよ。」「

熱い息が容赦なく晋作の顔にかかる。

ぞわぞわぞわっ

晋作は総毛立った。

冷や汗が流れる。

ひいにいにいにいにいつ・・・。じ、[冗談じやねーぞーつー！]のままでは俺が奴らにお守り出せぬぞ！」か、逆に本当にこよひにされちまつ。な、何とかしないと。

だが、頼みの綱の小五郎は幾松と楽しそうに談笑していく、たまに頑張れサインを送りてくるだけである。

くつそーつ。あいつ楽しんでやがるなー。あとで覚えとけよー、小五郎の奴う。

ふと小五郎から視線を逸らすと、そこに黙々とお酒を飲んでいる歳三の姿が目に入った。

その瞬間、晋作の頭が急に冷えた。

「いいつがお守りを持っている

確証など何もない。これは晋作特有の勘だと言つていい。今までふらふらしていた晋作の頭が一気に回転しだした。

「うなづきやヤケだつ。何とでもやつてやる。バレたらバレたで何とかなるだろ。その時は頼んだぜ小五郎！

「ねえ、近藤さま。」

晋作は近藤に逆に擦り寄つて精一杯の猫なで声で言つた。

「ちよつと小耳に挟んだんですけども、最近お守りの持ち主を捜してはるつて本当なの？」

「うんうん、そなんだよー。ちよつと前に取り逃がした奴の持ち物だからねえ。」

「へーっ。ねえねえ、それどんなお守りなの？ 僕・・・あ、いや、私すつゞく見てみたいなあ。」

晋作は近藤が答えるより先に彼の両手を素早く取ると両手で握りと握り締めた。田はうるうるしている。

「私も近藤さまのお役に立ちたいの。ほひ、じいじはたぐせんお密さんも来はるし。知つてゐかもしないから、ね。」

近藤は晋作の一生懸命な口調にすっかりめろめろである。

「そこまで言つてくれるなんて、ほんといい娘だのう。なあ、トシ。持つてるだらお守り。見せてやつてくれよ。」

歳三はちらりと近藤の方を見た。彼もほんのり顔が赤い。

晋作は思わず固くなつて顔を俯かせた。

だが

「だめだ。」

歳三はそつけない。

「なんでだよトシ。せつかくこんなに言つてくれてるのに。。」

「これは大事な戦利品なんだ。おいそれと見せるわけにはいかない。第一、自分からそんなこと言い出す奴は危険だ。」

歳三の態度は頑なである。

「トシ。そんなこと言つて、まだ持ち主見つかってないだろ。早く判明させないと、そのまま逃げられちまうぞ。」

晋作も必死である。近藤の隣りでうんづん頷いている。

「そうですよー。」

意外な方向から声がした。小五郎である。

「そういうものは匂がりますからねえ。相手も最初は探しているでしょうけど、すぐに忘れてしまうでしょう。そうなれば、たとえそのの真の持ち主であつたとしても、知らない、何それ、つてことになりますよ。」

そう言つと我関せずといった風に再び杯を傾けた。

「・・・分かつた。」

歳三は不本意つぱうだったが、『いや』などと憤を探り出した。

やつぱり持つてやがつたか

晋作と小五郎の田が光る。

それに近藤は気づいてはいない。

。

第5話・激突

「これだ。」

歳三が取り出したのは、ピンク色の小袋。しかもハート形。間違いない、「これだ。

晋作と小五郎はお互い目配せした。

「これに見覚えがあるか！」

歳三は鋭い口調で言った。

晋作はその様子に睡然とした。

おいおいおい、女性に対してもんな物の聞き方するか〜、普通。よーし、こいつなつたら・・・。

「近藤さまあ。」

晋作は近藤の後ろにこそそっと隠れるように袖を引っ張った。

「なんだかあの人こわい〜。」

その手はどことなく震えている。

近藤はその手を優しく取つた。

「大丈夫だよ。彼は恥ずかしがり屋さんなだけだから。君と同じで。

」

はあっ？ こいつのどこが恥ずかしがりだよつ〜〜！

大体、こんな奴と一緒にすんなつ〜〜！

歳三も同じようなコトを思つたらしい。

晋作と歳三の怒りの視線が同時に近藤に向けられる。

だが、近藤はがははと笑つただけで再び杯を傾けた。

小五郎はしきりに杯を重ねている。さすがの彼も笑いを堪えるのに必死らしい。肩が小刻みに震えている。

彼は目を真っ赤にしながら言った。

「土方さん、もう少し近くで見せてあげたらどうですか？」

「おお、やうだそうだ。そんな遠くからじや分かるハズがないものな。トシ。」
トシ持ち持つてきてくれ。」

近藤はポンッと一つ手を叩くと歳三に軽く手招きした。

歳三は軽く扱われてちよつとムツとしたらしい。が、そのまま立ち上がつた。

「・・・つたぐ。」

ぶつぶつ言こながら歳三が近づいてくる。

来た！！

さすがの晋作も顔に緊張が走る。

歳三は晋作の前に座つた。

「まじ、これだ。」

差し出された手のひらにピンク色のお守りがちよこんと乗つている。それを思わず食い入るように見つめた晋作。そして、恐る恐る手を出そうとしたその瞬間。

「・・・待て！」

お前、どつかで見たことある様な・・・?!

不意に歳三が晋作の顔を覗き込もうとした。

「え?...」

まずいっつ、バレた?!

次の瞬間、晋作はものすごい勢いで歳三の手からお守りをひつたくると思いつきり体当たりしていた。

ドカツ!!

突然の衝撃を歳三はまともに受けて晋作の体と共に畳の上に転がる。が、あまりの予想外の出来事に近藤も小五郎も何が起こったのか全く思考が働かない。

だがその時、座敷の襖がすぱつと小気味良く開け放たれた。甲高い声が座敷中に響き渡る。

「さあさあ、こちらの皆さまをおもてなしして ！」

その声を合図にどかどかと大勢芸妓たちが座敷の中に入ってきた。彼女たちはあまりのこと間に面食らっている近藤と歳三の周りに集まるで、歌つたり踊つたりのどんちゃん騒ぎを始めた。

ぱつ、と場が華やかになる。

幾松だ。

幾松は遠いところから小五郎にウインクして見せた。

彼女は万ーの時のために芸妓衆を残らずかき集めていてくれていたらしい。

小五郎はほつと胸をなでおろした。

晋作の姿は既にない。彼ならなんとか逃げ切ってくれるだろう。

やれやれ、最後まで冷や汗ものですねえ。

あとは頼みましたよ、晋作。

小五郎は再び杯を取つた。

第6話・追跡

一方、おせまつのかなーいのは歳三である。

何しろ、いきなり体当たりされたあげく、お守りを取られてしまい、気づけば芸妓たちに囲まれて身動き一つ取れないのだから。

しかし、あのひつたくった時といい、とても女の力とは思えねえ。奴は本当に・・・女か？まさか？！

彼が顔を覗き込んだときの相手の心底ぎょっとした表情がまだ脳裏に焼きついている。

まあいい、ひとつかまえればおのずと分かることだ。

歳三は乱暴に杯をあおると、そつと後ろの衝立に田配せした。

その裏には予想外の事態に慌てて移動してきた山崎蒸が潜んでいた。

「どうしましょう。」

「階下に永倉がいる。奴に追わせろ。お前は先回りして長州藩邸を

見張れ。いいな。」

「了解しました。では早速。」

衝立が一瞬揺れたかと思つと再び静かになった。

まだそう遠くには行つていないハズだ。捕まえるのも造作ないだ
ら、

歳三は隣りで上機嫌になつてゐる近藤にひつと舌打ちすると、再び飲み始めた。

*

さて、その頃晋作は通りを必死で駆けていた。

ひいひいひい

何でつたつて女つてやつは、いんな動をこくいもん着てんだよー

着物の裾はさかんに足に纏わりつき、足が前に出ない。

もいひなつたら無用の長物である。

六朝四傳考

ទាន់បាន់បាន់បាន់បាន់

着物の裾を思いつきり踏んづけたらしく、置作はしたたかに顔を地
面に打ち付けて倒れこんでしまった。

を起さないことに
。 せ、せばこにはで捕まつたら一貫の終わりだ。とにかく体

だが、着慣れない着物の重みで、いつものように機敏に立ち上がるまい。令子汗^{アヒン}が出てくる。

その時おもむろに晉作の上から提灯の光が照らされた。

もう追いつかれた
？！

思わず胸に入れていたお守りを握り締める。そして

* * *

しばらく後、

「おい。」

壬生浪士組、永倉新八が町を歩く侍に声を掛けっていた。

「はい？ 僕のこと呼びました？」

提灯を持つた侍は新八の方に振り向いた。暗くてよく分からぬが隣に派手目の女を連れているようだ。

「俺は壬生浪士組の永倉新八という者だ。さつきこの辺を芸者の女が通らなかつたか？」

「いえ、そんな人は通らなかつたですが……。その人が何か？」侍は考え込む仕草をした。

「ちょっと訳ありでな。捜している。」

新八は辺りを見回した。

「どうやらこの道ではなかつたらしい……。京の町はやせじへてかなわんな。」

「どうもご苦労様です。」

新八は頭をかいた。

「悪かつたな、引き止めたりして。」

「いえいえ、では。」

侍は軽く会釈すると、連れの女と一緒にその場を去ろうとした。それを見送ろうとして、新八は目を見張った。

あの連れの女の着物の色

鮮やかな朱色。まさか

。

「おいつ！！」

新八は思わず大声を出すと、連れの女の肩に手をかけた。
その瞬間

女の体は糸が切れた様にふらふらと地面に崩れ落ちた。

新ハはぎょつとして思わず手を引っ込めた。慌てて隣りの侍が女を抱きかかえる。

そして、キツと新ハを睨み据えた。

「いきなり何するんだっつ！！ この人は具合が悪くて、これからお医者に診てもらいに行く途中なんだっつ！」

怒りの炎が目に宿る。

「この人に何かあつたら、あんたどう責任を取つてくれるんだ！」
あまりの剣幕に新ハは思わずたじたじになつた。

「いや・・・すまない。悪かつた。軽率なことをした。・・・気をつけて行つてくれ。」

侍は少し表情を緩めた。

「ありがとう。」

彼らは、今度は新ハが走り去るのを見届けて再び歩き出した。

第7話・正体

・・・しばらく侍と女の一人は黙つて歩いていたが、もう堪えきれない様子で侍が隣りの女にひそひそと声を掛けた。

「おい、もうそろそろ演技はいいから僕に寄りかかるのやめてくれ。重くてかなわん。んでもって、もう少し速く歩けんのか？　いつまで経つても家につかねーだろが。」

隣りの女も負けじとやり返す。

「仕方ねーだろー。着慣れてねーんだからよー。好きでやってんじやねえつて。俺だつて、お前なんかに寄りかかつてんの屈辱なんだからな。」

言い合いながら、彼らの視界の先に河原町の長州藩邸が見えてきた。

だが、そこはあえて素通りしていく。

長州藩邸に光る視線を感じつつ、二人はそのまま近くの家に入つていつた。

ここは小五郎の持ち家である。

びしゃつ。

玄関の戸を開める。

女はがつくり床に手をつけると大きく息を吐いた。

「はあ～、助かつた～。玄瑞、恩に着る。」

「いや。しかし一時はどうなるかと思ったな～、晋作。」

侍もへたつと玄関先に座り込む。

実はこの侍が長州藩士で晋作の親友の久坂玄瑞、女が当のお尋ね者の晋作であった。

その時玄関の物音を聞きつけてか奥からぱたぱたつと人が走つて

きた。

「高杉さん、大丈夫でしたか」。良かつた一つ。

「弥一? お前藩邸じゃなくて、じつにいたんか?」

六
二

11

「畏かつた、無事で一つ。」

「機バニシば、マテル」四

「俺がそんなへゞすると思つか？・・・おしゃれ泣くなつて、弥一郎それに構わずわんわん泣いている。今回の件に相当責任を感じていたんだろう。監作はやれやれと、ほっと息をつくと弥一郎の背中を優しくなでた。

そうしている間に奥から栄太郎がのつそり現れた。

彼の冷静な物言いに晋作は呆れた。

卷之三

栄太郎が何か言おうとした時、不意に玄関先から声がした。

「栄太郎、そんなのこいつに要らんからな。図に乗るだけだ。」

あゝ、夕坂さん、お帰りなさい。

「新編」卷之二十一

「すいませんねえ、来たといでこんなバタバタさせてしまって。
全くだ・・・。涼に来た昇々借り出されるとほな。しかし、お

前ら何やつてんだよ。一体？

亥猪は創作をかぶらし原稿と肩を震わせてくすくす笑い出した。

晋作はちよつとムツとした。

「そ、そのか！」・・・いやー思いのほか似合つとんなー。さすが

言われて晉作の顔がみるみる赤くなる。

・・・くつそー、よりにもよつて一番見られたくない奴に見られた挙句、不覚にも助けられてしまつとは。

玄瑞はまだ笑つてゐる。相当ツボだつたらしい。

「いやー。でも浪士組の奴に肩をたたかれた時の演技サイコーだつたぜ。こひ、ふらつと倒れてこられた時には僕の方がびっくりした。

「へーつ、高杉さんでもそんなことするんですねえ。」

栄太郎が心底感心する。

それになんとなく力チンときた晋作。

「・・・弥一、離れる。着替えてくるー。」

「僕、そのままでもいいんですけど・・・。ひとつても素敵ですし。」

「あほかつー！ お前まで何言つてやがる。もう一度ごめんだからな、こんなこと。」

晋作はすたすたと奥の部屋に行きかけて、ふと懐を探つた。

「あ、ほれ、これだろ。松陰先生がくれたお守りってのは。」

ぽんつ

小袋を弥一郎の方に投げてよこす。

「や、やうです！ これです。松陰先生がくれたお守り。ありがとづりやりますー！」

弥一郎はお守りをぎゅっと握り締めて言つた。

心底幸せそうに満面の笑みで溢れている。

その様子を見ながら、栄太郎が弥一郎に言つた。

「ねえねえ、弥一。そのお守り、何が入つてるの？」

「さあ、恐れ多くて開けたことないんで・・・。」

弥一郎は首を傾げている。

「」の際開けて見せてよ。」

栄太郎は興味津々である。

「確かに中見てみたいよなー。」

晋作も弥一郎の傍にやつてきた。玄瑞も思慮深く言つ。

「あの連中に開けられてなかつたのは幸いだつたが、一度は確かめてみる必要がありそうだな。」

皆に口々に言われて弥一郎は意を決した様だった。

「そうですね・・・。開けてみます。」

するするする・・・。

皆が息を呑む中、小袋の包みが開けられる。
出てきたのは一片の紙。

「紙・・・ですね。」

弥一郎がその封印を解いて恐る恐る開ける。

その中を見て、皆の時が一瞬止まつた。

「な、なんだよこれーっ。」

第一声は晋作だった。

「あつはつはつ。これはいいですねえ~。」

栄太郎は大笑いしている。

「全く・・・この師にしてこの弟子ありつてどこかあ?」

玄瑞も笑いが止まらない。

それは富部鼎蔵が描いた、松陰先生の女装姿の絵であった。

が、弥一郎だけは笑いもせず、まじまじとそれを見ていた。

そして、がばつ、と顔を上げた。

「僕も先生みたいに頑張って女装も上手くなりりますっつー！」

「ならんでいいつつー！」

三人が同時に突っ込みを入れた。

遠くでほーほーとふくろうの鳴く音が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6390f/>

幕末異聞 疾風録4～必殺？！ お守り奪還作戦！

2010年10月10日00時59分発行